



TITLE:

学会抄録 第192回京都皮膚科泌尿器科集談会

AUTHOR(S):

CITATION:

学会抄録 第192回京都皮膚科泌尿器科集談会. 泌尿器科紀要 1958, 4(5): 304-305

ISSUE DATE:

1958-05

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/111604>

RIGHT:

学 会 抄 録

第192回京都皮膚科泌尿器科集談会

昭和32年12月14日 於 京 府 大 臨 床 講 堂

(泌尿器科の部)

1 異常血管による水腎症 楠瀬信二・柳田信平
(京府大)

24才, ♂, 初診, 昭和32年9月8日.

7~8年前より疲労後、或は体を左右に曲げた後に左腰部に鈍痛を月1回位訴えていたが最近2週間に1~2回になり、而も痛痛様になった。尿は透明、酸性で異常なく、膀胱鏡的には異常なく、青排泄は右尿管口からは正常、左尿管口からは初発で稍々遅延し、逆行性腎盂レ線像は左右共に腎盂がかなり拡張し、特に左側に著明で両側共腎盂尿管移行部にて急激に細い正常大の尿管に移行していた。両側共に異常血管の尿管起始部絞扼による水腎症を疑い、取敢えず、苦痛を訴えている左側に就いて、腰部斜切開によつて腎盂尿管部を検索した処、腎動脈異常枝が尿管前面を横ぎり、尿管を圧迫し、腎下極に終っている事を確めた。よつて血管異常枝を結紮離断し、腎下極を部分切除した処、腰痛は全く消失した。恐らく右側にも同様の異常のある事が想像されたが、無症状であつた為、右側の方は今回はふれなかつた。

2 アニリン色素によると思われる膀胱腫瘍の1例 友吉忠臣(京大)

39才の染料工場工員が頻尿、終末排尿痛、終末血尿を訴え来院したものについて検索の結果右側壁頸部に近く発生せる腫瘍を発見、バイオプシーによりCancerであることを確認したのち、膀胱部分切除術により腫瘍を剔除、剔出様本は異型性のつよい移行上皮癌の組織像であつた。尚アニリン色素をふくむ一般発癌物質の腫瘍発生機転につき最近の知見を紹介した。

3 過剰尿管の膀胱外開口例 六車勇二(京府大)

10才, 女, 初診, 昭和32年10月26日. 主訴, 尿失禁. 診ると全身状態はよく特記すべきことはないが、詳細に問診すると始終尿失禁のある外に正常排尿もある処から尿管の膀胱外開口を疑い、外陰部を精査した処、腔口より尿が漏出し、内診により腔右側壁に尿管の開口している事を確めた。尿は清澄。膀胱鏡的には粘膜に異常なく両側尿管口は正常位置にあり、青排泄

も両側正常であつた。そこで膀胱内両側尿管口に尿管カテーテルを挿入すると共に腔に開口する尿管口からも尿管カテーテルを挿入し、三者の逆行性腎盂撮影と同時に後腹膜気体注入法を併用した所、右側重複腎盂の上部のものは拇指頭大で橢円形をなし、尿管は正常尿管の約5倍大で拡張し下端の開口部で狭小となつていた。他の両腎盂、尿管像は大体正常。過剰尿管口からの青排泄は2時間10分であつた。即ちこの所見によると本例は岩下教授の分類による尿管膀胱外開口の第4型即ち右側重複腎盂兼完全重複尿管の腔への開口であることが判明した。そこで右腰部斜切法により過剰尿管を、その属する腎上極を之を栄養する異常動脈と共に切除(右側半腎摘出術)全治せしめた。組織学的にみると腎実質では糸球体は大体正常、細尿管は皮質では密に配列し間質結締組織少く、髓質では高度に拡張し間質結締組織が増殖し、一部腎実質内に小指頭大孤立性小嚢胞がありこの部では実質は圧迫萎縮、ヘンレー氏係締及び集合管の拡張、一部細尿管にヒアリン様円嚢を認め、糸球体はほぼ正常であつた。

4 尿路感染症に対する Oleandomycin 使用経験 日野 豪(京大)

Oleandomycin は Pfizer 社で発見された抗生物質でその抗菌スペクトルは Erythromycin や Penicillin に似ている。本剤の最大の特徴は他の抗生物質に耐性をもつブドウ球菌に有効なことであり、私はこの点を確認し、急性尿道淋8例、非淋菌性尿道炎5例、膀胱炎3例、腎盂炎及び腎盂腎炎4例につき臨床実験を行い良好な結果を得た(泌尿紀要4巻1号参照)。

5 アメリカに於ける前立腺癌及び肥大症治療の現況 宮崎 重(京大)

The Johns Hopkins Hospital, State University of Iowa, 京都大学, 東京大学の各泌尿器科に於て1年間に行われた前立腺肥大症及び癌の手術数を比較検討した。同時に手術不能の前立腺癌に対する、放射性同位元素を用いる方法, Adrenalectomy 等にも言及した。

第193回京都皮膚科泌尿器科集談会

昭和33年2月15日 於 京 都 府 医 師 会 館

1 大動脈撮影の診断的価値 後藤薫・片村永樹 (京大)

今日臨床的にひろく応用されている大動脈撮影法について、経腰的大動脈撮影法、逆行性撮影法および、経静脈的方法のそれぞれについてのべ、われわれのおこなった140例の経験例のうちから、以下のものについて、その診断的価値を論じた。

1 : 腎畸形(先天性単一腎・発音不全腎・馬蹄鉄腎・下垂腎・囊胞腎・腎囊胞など), 2 : 水腎症, 3 : 腎腫瘍, 4 : 腎周囲血腫, 5 : 半腎切除, 6 : 大動脈瘤, 7 : Gold-blatt 高血圧症

2 結核性萎縮膀胱に対する回腸膀胱吻合術 稲田務・酒徳治三郎・片村永樹・友吉忠臣 (京大)

高度の結核性萎縮膀胱のため放置すれば尿管逆流現象のため腎機能の廃絶をきたすことのあきらかな2例

に対しU字型遊離回腸片を膀胱頂部に吻合する Rubritius 氏法をおこない膀胱容量の増大、頻尿の減少をえたので報告する。一時的腎瘻術をあらかじめおこない、術後は粘液性分泌物の排除のため持続膀胱洗滌装置を使用した。

3 昭和32年度に於ける我教室泌尿器科の統計的観察 高石喜次 (京府大)

外来患者総数は男737名, 女270名, 計1003名で男女比は2.73 : 1 であり, 入院患者は男111名, 女30名, 計141名であり男女比は3.7 : 1 であつた。疾患別観察, 手術統計等詳細は昭和31年度と併せ原著として発表の予定。

4 昭和32年度京大泌尿科外来患者の統計的観察 稲田務・酒徳治三郎 (京大)

泌尿紀要4巻5号参照。